氏　名（本籍）	大黒一司（だいこくひとし）
学位の種類	博　士（医　学）
学位記番号	医博第 2629 号
学位授与年月日	平成 21 年 3 月 25 日
学位授与の条件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研究科専攻	東北大学大学院医学系研究科 （博士課程）医科学専攻
学位論文題目	脳卒中リハビリテーションの費用効用分析と改善効率

（主　査）

論文審査委員　教授　濃沼信夫　教授　出江紳一

教授　糸山泰人

論 文 内 容 要 旨

【研 究 目 的】

本研究は，回復期リハビリテーション病棟に入棟した脳卒中患者に対するリハビリテーションの効果を経済面とQOL面から評価し，回復期リハビリテーション病棟における効率的かつ患者や家族の立場に立ったリハビリテーションのあり方を検討することを目的とする。

【研 究 対 象】

回復期リハビリテーション病棟の脳卒中患者とした。

【研 究 方 法】

医療従事者が判定する前向き調査とし，費用効用分析およびADL改善効率を用いて，自立度区分別のリハビリテーション効率を算出した。

【研 究 結 果】

分析対象とした患者は127名で，平均年齢は71.6歳，男性が52.8%を占めた。BI得点によるADL区分は，BI60点以上（自立群）が48名，40点以上60点未満（半自立群）が35名，40点未満（非自立群）が44名であった。医療費はADL自立度が高い群が有意に少なかった。在棟中の増分QALYsは，多い順から非自立群，半自立群，自立群であった。費用効用分析の結果，在棟期間中の1QALYあたりの医療費は，少ない順から非自立群，半自立群，自立群であった。改善比率は，自立群が大きく，3群間で有意差が認められたが（$p<0.01$），回復効率には有意差はなかった。

【考　　察】

費用効用分析の結果，非自立群が1QALYあたりの医療費が最も少なく効率的であった。自立度の低い患者であっても介入により効用値を高めることができれば，効率的なリハビリテーション効果が得られることになる。3群間の回復効率に有意差は認められなかったことは，回復期リハビリテーション病棟におけるリハビリテーションが自立度に応じて実施されているといえる。

【結論】増分QALYsは自立度の低い群が高い群より多いことが示めされた。また，自立度の低い群は高い群より1QALYあたりの医療費が少なく，医療経済的に効率的なリハビリテーション効果が得られていた。従って，回復期リハビリテーション病棟における患者や家族が納得する効率的で効果的な脳卒中リハビリテーションのあり方として，機能的評価とともにQALYを用

いて経済面とQOL面を評価し，自立度に応じた在棟日数や介入期間を含む介入プログラムが必要である。

審 査 結 果 の 要 旨

回復期リハビリテーション病棟に入棟した脳卒中患者に対するリハビリテーションの効果を，経済面とQOL面から評価し，回復期リハビリテーション病棟における効率的かつ患者・家族の立場に立ったリハビリテーションのあり方を検討することを目的に作成された論文である。回復期リハビリテーション病棟の脳卒中患者を対象に，医療従事者が判定する前向き調査を実施し，費用効用分析およびADL改善効率を用いて，自立度区分別のリハビリテーション効率を算出している。

患者127名のデータを分析した結果，医療費はADL自立度の高い群で有意に少ない，在棟中の増分QALYsは非自立群，半自立群，自立群の順に多いなどの知見が得られている。費用効用分析では，在棟期間中の1QALY当たり医療費は非自立群，半自立群，自立群の順に少ない，改善比率は自立群が大きく，3群間で有意差が認められる（$p<0.01$），回復効率には有意差はないなどの結果が得られている。

これらの結果から，自立度の低い群は高い群に比べ1QALY当たりの医療費が少なく，医療経済的に効率的なリハビリテーション効果が得られていることが示唆される。すなわち，回復期リハビリテーション病棟において，患者・家族が納得する効率的で効果的な脳卒中リハビリテーションを実践するには，機能的評価とともにQALYを用いた経済面とQOL面の評価，および，自立度に応じた在棟日数や介入期間を調整する介入プログラムが必要と考えられる。

よって，本論文は博士（医学）の学位論文として合格と認める。